

論文内容の要旨

Length of stay of suicide attempters who became inpatients from emergency outpatients: Examination of the predictive factors
(救急外来から精神科病棟入院となった自殺企図者の入院期間について：その予測因子に関する検討)
(大沼禎史, 大塚耕太郎, 遠藤仁, 本多笑奈, 佐藤広隆, 中村光, 酒井明夫)
(Journal of Iwate Medical Association 69 巻, 3 号 平成 29 年 8 月掲載)

I. 研究目的

救急外来に搬送される自殺企図者は世界的にはかなりの数にのぼり、日本でも同様である。自殺未遂者は、企図時の身体合併症や後遺症、企図の動機となった問題、退院後の再企図のリスクなど、身体面、精神面、社会的側面において、複合的で多岐にわたる問題を抱えていることが多い。再企図を防止するためには、症例ごとの入院期間 (Length of Stay; LOS) の差異を踏まえ、あらかじめ個々の自殺企図者の LOS を予測し、それに基づいて個々の症例に則した治療計画を立てていく必要がある。本研究では、精神科救急サービスを経由し総合病院精神科病棟に入院となった自殺未遂者を対象に、背景因子や臨床評価などを調査し、精神科病棟での LOS と関連する因子を明らかにすることを目的とした。

II. 研究対象ならび方法

2003 年 1 月 1 日から 2010 年 12 月 31 日までの 8 年間に岩手医科大学附属病院高度救命救急センター(以下、センター)及び 1 次 2 次救急外来(以下、1 次 2 次)を受診した 250,625 件を母集団とした。期間内の精神科救急対応患者 13,899 件の中で、精神科病棟に直接入院した患者は 2,144 件であった。その中で自殺・自殺未遂の診断基準(岸ら, 2000)に従い、4 項目(本人の陳述がある、遺書または本人からの予告があった、自殺行為の目撃者が存在、司法関係者または剖検により断定)の 1 つでも満たし、救急施設からの転室時に生存していた 828 件を自殺未遂者として本研究の対象とした。調査項目は患者背景や精神症状、brief psychiatric rating scale (BPRS) 得点、ICD-10 診断、重症もしくは軽症自殺企図群 (absolutely dangerous: AD or relatively dangerous: RD 群)、LOS などである。

LOS と関連する因子を明らかにするために、各調査項目を説明変数、入院日数を従属変数とし、線形重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。統計処理は SPSS 22.0 J for Windows を使用し、いずれの検定においても有意水準は 5%未満とし、有意確率を数字で示した。データは個人が特定可能な項目は除外し、データの管理や処理の過程でも個人情報の保護に配慮した。なお、本研究は岩手医科大学医学部倫理委員会の承認をうけている。

Ⅲ. 研究結果

対象の約7割は女性であり、LOSの平均値は13.4±40.0日であった。線形重回帰分析の結果でLOSに関する有意な正の標準化変数を示した因子としては、男性($\beta=0.137$)、ICD-10診断のF0($\beta=0.110$)、AD群($\beta=0.105$)、状態像の幻覚妄想状態($\beta=0.131$)、BPRS合計点($\beta=0.086$)、自殺企図手段の入水($\beta=0.118$)の6項目が抽出された。また、負の標準化係数を持つ因子として自殺企図手段の薬物(標準化係数 $\beta=-0.136$)、通院先が当院以外($\beta=-0.096$)、状態像の酩酊状態($\beta=-0.073$)、入院形態の任意入院($\beta=-0.083$)の4項目が抽出された。

Ⅳ. 結 語

本研究では精神科救急サービスを利用後に総合病院精神科病棟へ入院となった自殺未遂者患者のLOSについて、延長させる因子として男性、ICD-10診断のF0、AD群、状態像としての幻覚妄想状態、BPRS合計点、自殺企図手段の入水、短縮させる因子として自殺企図手段の薬物、当院以外の通院先あり、状態像の酩酊状態、自発的入院である任意入院が抽出された。これらは身体的重症度、重篤な精神症状、社会生活機能、治療状況、治療における自発性などに関連する因子である。

自殺予防の観点では自殺企図直後の対応が重要視されており、LOSが限られている場合であっても必要な評価や介入は確実に実施されなければならない。そのためには、近年実証された系統立てられたケース・マネジメントにより、エビデンスに基づいたプロトコルに沿って精神症状や再企図可能性の評価を行い、患者毎に必要なケースワークを効率よく導入することが重要であると考えられた。

論文審査の結果の要旨

論文審査担当者

主査 教授 森野 禎浩 (内科学講座：循環器内科分野)

副査 教授 井上 義博 (救急医学講座)

副査 講師 八木 淳子 (神経精神科学講座)

自殺企図歴を有する患者の自殺リスクは、標準化死亡比で 38.4%と著しく高いことが知られている。自殺未遂で入院した際に、個々の症例に則した治療計画が重要であるが、肝腎の入院期間 (Length of stay: LOS) を予測しうる指標がない (研究の経緯)。本研究論文は、LOS の独立した予測因子を検討するため (研究の作業仮説)、2003 年から 2010 年までに本学を受診し、精神科病棟に入院した自殺未遂患者 828 例を対象に、背景因子や臨床評価を調査し、線形重回帰分析を行った (方法の概略)。対象の 7 割は女性で、LOS の平均値は 13.4 ± 40.0 日であった。LOS の正の独立した予測因子は、男性 ($\beta = 0.137$)、ICD-10 の F0 ($\beta = 0.110$) と AD 群 ($\beta = 0.105$)、幻覚妄想状態 ($\beta = 0.131$)、BTRS 合計点 ($\beta = 0.086$)、自殺企図手段の入水 ($\beta = 0.118$) の 6 項目であった。負の因子は自殺企図手段の薬物 ($\beta = -0.136$)、通院先が当院以外 ($\beta = -0.096$)、酩酊状態 ($\beta = -0.037$)、任意入院 ($\beta = -0.083$) の 4 項目であった。本研究は LOS の長期化ないし短期化に関連する因子を初めて明らかにし、自殺未遂入院者に対する治療計画の不可欠な LOS の予測方法を提供した (結果の概略)。

本論文は、自殺未遂患者の LOS を予測し、自殺企図直後から必要な評価や介入を入院期間内に実施しうる治療計画を策定可能にした。学位に値する論文である (研究の価値)。

試験・試問の結果の要旨

救急外来から精神科入院となった自殺企図患者の入院期間に関連する予測因子の検討についての試問を行い、適切な回答を得た。学位に値する学識を有していると考えられる。

参考論文

- 1) 統合失調症における自殺企図の特質：救急受診例に基づく検討 (肥田篤彦, 他 8 名と共著) 岩手医誌, 64 巻, 2 号 (2012) : p99-111
- 2) Aripiprazole と valproate の併用が有効であった双極性感情障害の 1 例 (水谷歩未, 他 6 名と共著) 臨床精神薬理, 16 巻, 7 号 (2013) : p1051-1055
- 3) 脳梗塞後の失語症と認知症に随伴したインスリノーマの 1 例 (水谷歩未, 他 3 名と共著) 精神科, 23 巻, 2 号 (2013) : p253-256
- 4) Consideration on the new psychiatric emergency cases related to the Great East Japan Earthquake (東日本大震災関連の精神科救急初回受診例に関する検討 (吉岡靖史, 他 8 名と共著) JIMA, 67 巻, 3 号 (2015) : p101-117